

■シリーズ■ 中学校武道

授業の充実に向けて

176

——「今」の時代の武道授業を追い求めて——
（コロナ禍を経て継続する「なぎなた」）

5

大阪府河内長野市立千代田中学校教諭 小椋かおり

中学校での武道授業が必修化となつて以降、本市では男女ともに「柔道」を採用し、本校においても外部指導員の力を借りながら、体育科教員が「柔道」の授業を行ってきた。

そんななか到来したコロナ禍の影響から見直しを余儀なくされた武道授業に、教員の熱意により「なぎなた」を取り入れることとなった。本稿では、教科担当の学びや現在までの継続の経緯、短い单元ながら「なぎなた」を学ぶことで育まれた生徒の主眼的に学びに向かう姿勢について紹介する。

1 本市における武道必修化（コロナ禍前）

平成24年度の学習指導要領改訂に伴い武道・ダンスが必修化されたのを機に、河内長野市の七つの中学校では武道種目に「柔道」が採用されることとなり、柔道着などが準備された。

また、授業実施にあたっては、体育科の教員に向けた研修が実施されるとともに、柔道を専門とする教員も限られることから、市

2 「なぎなた」に触れる

委を通じて要請された地域の指導者が外部指導員として各校の授業をサポートしていた。

本校生徒が初めて授業のなかで「なぎなた」に触れた時期は、コロナ禍前の平成30年度にさかのぼる。

当時、3年生の学年主任だった筆者が、全日本なぎなた連盟「中学校武道必修化プロジェクト」の



千代田中学校でのなぎなた授業（令和2年）



全員で打ち方を練習

推進委員を請けたことから、まずは勤務校の生徒たちの「なぎなた」に対する興味や関心、また取り組み方などを実際に見てみたいという思いをもった。しかしながら、自身が国語科の教員のため、学年の担任陣のなかで剣道部顧問でもあった体育科教員の協力を得て、3年生の男女に、総合の時間を活用した1時間の体験授業の形で「なぎなた」を実施した。これが本校の「なぎなた」授業の最初

である。授業では、一コマという限られた時間ということもあり、「なぎなた」の歴史などについての説明は短時間にとどめ、実際に「動く」ことに重点をおいた。

〈体験授業の流れ〉

- ① 概要説明
- ② 「なぎなた」を持つて 礼法
- ③ 構え方（中段・八相）
- ④ 打ち方（面・側面・すね）
- ⑤ 防具を着けた教員に打突

生徒たちは、古典の教材で武器としての「薙刀^{なぎなた}」は学んでいたものの、初めて「なぎなた」を見て触れた。普段の体育の授業では運動に苦手意識をもつ生徒も、初めて学ぶ種目への好奇心と全員が「初心者」であるという安心感から、男女を問わず体験に前向きに取り組んでいた。

また、3年生の生徒のなかには、授業に前向きでない生徒や生活指導の面に課題のある生徒もいたが、事前に教員間で危惧した長物である「なぎなた」を扱うことでの事故やけが、また生徒間でありがちな「ふざけ」行動もなかった。むしろ、実際に打突する場面では、気後れする生徒が多くみられた。この様子から、生徒自身が「武道」は武技に由来するもので、真摯^{しんし}に取り組まなければならないということを感じてきているのではないかと見て取れたが、当時の千代田中学校の保健体育の武道授業は「柔道」であり、これ以降、授業に「なぎなた」が取り入れられることはなかった。

3

コロナ禍における 武道授業の模索

前述のように、本校での「なぎなた」授業は体験にとどまり、保健体育科の武道授業においては、男女ともに従来通り「柔道」を実施していた。しかし、令和元年度末からまん延し始めた新型コロナウイルス感染症によって、休校措置や、授業が再開されてからもしばらくは分散登校の期間があり、令和2年度以降は、保健体育科のみならず、すべての教科がこれまでの授業の形の見直しを迫られることになった。

そのような折、当時2年生の担任であった本市採用2年目の体育科教員と今後の授業について話すなかで、武道授業をどのように進めるべきなのか……との相談があった。

それに対し、「感染対策を講じ、相手との距離と安全を確保できる種目として、『なぎなた』を取り入れてみてはどうか」と提案して

みたところ、対人での間合いの近い「柔道」に不安を感じていた教員から、「ぜひとも『なぎなた』を取り入れたい。そのために、まずは自分がなぎなたを学びたい」との要望がでた。

そこで、自分たちの担当学年である2年生女子から、授業になぎなたを取り入れることを学校長に要望。その了解を得るため、全日本なぎなた連盟発行の『手引き』や『ノート』、リーフレットなどを用いて、授業に「なぎなた」を取り入れることの効果を説明し、「令和2年度武道等指導充実・資質向上支援事業」（スポーツ庁）により、指導者・用具などへの支援が充実していることも説明した。

「『なぎなた』を取り入れることの効果

- ・長いなぎなたを正しく扱うことで相手との距離感（間合）を学べる。
- ・左右の持ち替え操作を習得することで姿勢が整い、バランスの良い身体活動を行うことができる。

・武道特有の礼法を重んじて、「自らを律し相手を敬う」礼の心を養う。

また、実際に授業が開始した際には、先の「武道等指導充実・資質向上支援事業」を活用して、全日本なぎなた連盟に用具の借用と授業協力者の派遣を依頼できることも合わせて説明し、「『なぎなた』採用への理解を求めた。

当時の本校校長は「少林寺拳法」の指導者であり、「武道」そのもののへの造詣が深く、コロナ禍でも「武道」の学びを途切れさせないため、他校に先駆けて新しい武道種目を取り入れたいと希望する体育科教員への理解を示した。

さらに、教頭が保健体育科で、生徒たちに新しい種目を体験させることに協力的であったことも「『なぎなた』採用への後押しとなった。

なお、余談となるが、ソーシャルディスタンス確保の観点などから授業効果の共通点も多い「少林寺拳法」も、校長自身が体育科教員に指導法を助言する形で武道授

業に取り入れられた。

4

授業者の技術向上

武道授業の新種目として取り組むこととなった「なぎなた」ではあるが、担当教員を含め、本校には「なぎなた」経験者が国語科の自分しかおらず、常に授業をサポートできるわけではなかった。

そこで、全日本なぎなた連盟「中学校武道必修化プロジェクト」推進委員の今浦千信先生に、休校中の時間を利用した体育科教員向け事前指導をお願いした。今浦先生は保健体育科教師ということもあり、「武道」としての「なぎなた」に加えて、保健体育科の授業としての「なぎなた」の指導法も教えてもらうことができた。

授業者（未経験の体育科教員）にとっては、実際の授業時の授業協力者派遣に加えてこの時間をとることができたことで、授業への不安が軽減され、余裕をもって授業に臨む準備ができた。

さらに、授業時には大阪なぎなた連盟所属の複数の授業協力者にご協力いただき、技術・安全面において全幅の信頼をもって臨むことができた。

〈授業担当者への事前指導の流れ

- ①「なぎなた」の基礎知識
- ②基本動作の習得
- ③生徒視点で模擬授業を受ける
- ④評価上の留意点を考える
- ⑤授業協力者との連携について

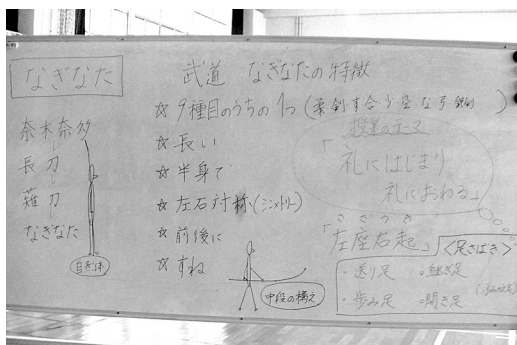
（資料）

- ・「『なぎなた』授業ノート」
- ・「『なぎなた』教師用指導ノート」
- ・中学校武道必修化指導書『なぎなた』
- ・「なぎなた授業協力者の手引き」
- ・なぎなたリーフレット

5

千代田中学校での「なぎなた」実践

「なぎなた」を取り入れることが決定し、令和2年度の2学期に2年生の女子が授業を受けることに



ホワイトボードになぎなたの特徴を明記



授業者と授業協力者による模範



千代田中学校でのなぎなた授業（令和2年）

なった。初年度は、体育科としても初めての試みという事もあり、『「なぎなた」授業ノート』に沿って、授業を実施した。

〈授業計画および評価〉

『「なぎなた」授業ノート』

※評価に際しては映像も資料として活用

〈授業者（体育科）の声〉

「これまで武道の授業では、自分の視野が狭くなり、余裕がない……と感じることが多かったが、授業協力者の先生との打ち合わせのなかで、授業の見通しを立て、アドバイスを受けながら授業を進めることで、これまで困っていたことが少しずつ解消された気がした」

〈授業協力者の声〉

「授業前の打ち合わせや、授業後の振り返りを丁寧に行い、授業者の技術が向上したため、生徒への技術指導や安全管理がよりきめ細かくできるようになった」

〈生徒の声〉（アンケート集計）

・（裸足になるのが）少し寒かった。

・バチッと当てるのがおもしろかった。

・2人組するのがよかった。

・形を覚えるのが難しかった。

・先生たちが（なぎなたを）やっているのを見るのが楽しかった。

・「しかけ応じ」を2人で息を合わせて仕上げていくのが難しかった。

・他の教科と違って、発表の時はとても静かで緊張感があった。

・正座してのあいさつや、荷物や靴をちゃんと並べたり片づけたりするのが気持ちよかった。

6

生徒の学び

次に、「なぎなた」授業を受けた生徒の印象的な変容について述べておきたい。

最初の授業時、普段通りの体育授業のつもりで体育館に集合した生徒に、更衣後靴下を脱ぎ、自分の荷物をまとめておくことを促した。生徒たちは体育館の壁際に思

い思いに荷物を置き、教師と授業協力者の前に集合した。

その時、授業協力者として来校していた今浦先生から荷物の置き方について、最初の「指導」を受けた。生徒たちにとって、武道の心に触れるなかで学ぶ「残心」(授業ノート9頁)に照らし合わせて、自分の行動を振り返る大きなきっかけとなった。

それ以降、靴の脱ぎ方(並べ方)や荷物の置き方など、生徒たちは見違えるような姿勢で授業に臨むようになり、その姿勢は普段の生活のなかでも生かされていった。

また、体育科の教員自身が、示範の際に少しぎこちない様子や、生徒と同じようになぎなたに悪戦苦闘する姿を見せたことで、生徒同士だけでなく教師と生徒の間にも和やかな空気が流れ、普段体育が苦手と感じている生徒も気後れすることなく授業に向かうことができた。

さらに、「なぎなた」を本格的に取り入れた令和3年度、「なぎなた」の学びが2年目となった3年生では、前年度習得した技術を

応用した基本打突の組み合わせである「しかけ応じ」(演技)を学習した。

「しかけ応じ」とは、決められた技を、2人一組で心を通わせて行い、競技では、2組のペアの完成度によって勝敗を決するものである。「しかけ応じ」は、学習指導要領の保健体育領域の一つ、F武道(第3学年)の(1)知識及び技能のねらいだけでなく、(2)思考力、判断力、表現力等のなかで挙げられた「攻防などの自己や仲間の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の考えたことを他者に伝えること」、また、(3)学びに向かう力、人間性等のなかで挙げられた「武道に自主的に取り組むとともに、相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとする」と、自己の責任を果たそうとすること、一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとするなどや、健康・安全を確保すること」とのねらいに大いに合致した種目である。

当初はこの学年によらず多くの

女子生徒は、武道について特に知識や興味があるわけではなかったものの、この「しかけ応じ」を3年生の授業で実施した際、すべての生徒が主体的に授業に臨む姿勢がみられ、武道授業の継続の重要性を思い知らされた。

「しかけ応じ」の単元での最終授業は、実際の競技のように試合形式で各ペアの発表を行い、生徒が審判となって勝敗を決するというものであった。

そこで、教員を驚かせたのが、多くの生徒が自己の技術力の向上にむけ自主的な練習を重ねただけでなく、自分がペアを組む相手を考えてやる心、試合相手となるペアを観察する力、授業の見通しをたて、授業を運営する力を発揮したことである。

さらに驚いたことに、この生徒たちは、授業内での試合結果をふまえ、自主的に他クラスとの交流試合の準備を始め、教員に開催の依頼をしてくるに至った。これこそ、主体的に学ぶということにほかならないのではないかと、教師側が考えさせられた出来事で

あった。

7 今後の武道授業について

令和2年度から取り入れられた、本校の武道授業「なぎなた」は、新校長となった昨年度も継続し、本年度(令和5年度)も、2学期以降の授業実施が予定されている。昨年度本校に着任した校長自身が高校時代に体育の授業で「なぎなた」を経験しており、「なぎなた」への理解が深かったことも幸いした。保健体育科では、昨年度までの担当教員が抜け、新たなメンバーが加わった体制となったものの、昨年度通りの授業実施を計画している。

また、昨年度までは、女子のみの授業であったが、本年度は男子生徒にも「なぎなた」を取り入れることとなり、全学年の武道授業が「なぎなた」となった。新たに本校に赴任した教員も「なぎなた」未経験ながら前向きに取り組む姿勢をみせ、夏休みを利用して



▲▼千代田中学校でのなぎなた授業（令和3年）



今浦先生から授業の進め方や技術指導を受け、準備を始めている。また、本年度市内の教科研究会に

おいても、保健体育科では「なぎなた」の研修が予定されている。事前の準備を毎年丁寧に行うこ

とによって、将来的に体育科の教員が授業協力者のサポートを仰ぐことなく授業を展開できるようになれば、行事などによって変更が起きやすい授業の時期や、クラス、時間割、共習の可否などに柔軟な対応ができるようになり、今後継続的に授業を実施していくためのモデルになると考えられる。専門ではない教師の技術力が向上し、伝達ができれば、必要な用具が少なく、専用の施設が不要な「なぎなた」は武道授業に採用しやすく、体育科教員の武道授業への不安も解消される。

本来、本市の武道授業は「柔道」であるが、コロナ禍によって、多様な武道に触れる機会が訪れた。採用の理由は、「コロナ禍」という課題をいかに軽減（解決）するか、であったが、実際に取り入れてみると、武道授業としての「なぎなた」だけではなく、「礼に始まり礼に終わる」という言葉に代表されるような日常生活に生かすことのできる学びの豊富な授業、また、生徒の主体的な取り組みの姿勢を養うような授業が展開され

ている。今後も、この学びは武道授業によって担われるべきものであると思う。

最後に

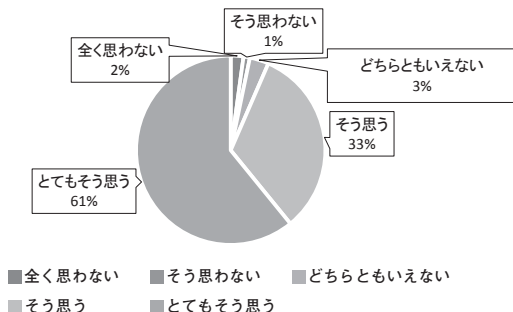
8

自分のような他教科の立場からでは、武道授業にどの種目を採用するかということを決定はできない。しかしながら体育科の先生方にとつては悩ましい問題であり、苦心しておられるように見受けられる。

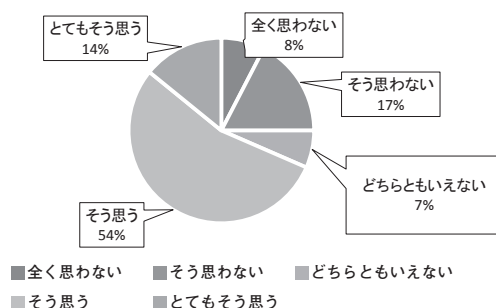
専門ではない単元を教えることはどの教科にもあることだが、実技を伴う教科では、一つのトラブルが「命」に関わることもある。本校においては、生徒が「楽しい」「さらに深めたい」と思える授業を展開するために、多くの縁を大切にし、各方面の協力を得ながら「なぎなた」授業が継続することをお願い、教科を超えた横断的な相互支援のつながりを広げていきたい。

資料「なぎなた」授業後の生徒へのアンケート（2021 年）

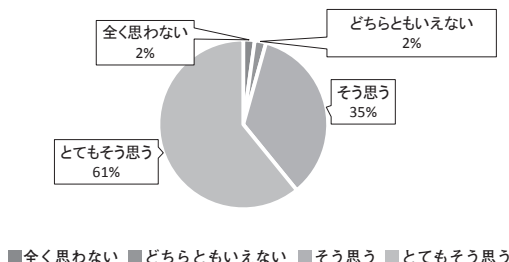
相手と協力することが大切だ(n=92)



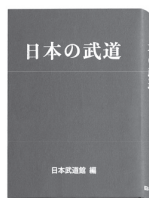
長いなぎなたの扱いが難しかった(n=92)



相手との間合いが大切だ(n=92)



日本武道館の単行本



日本の武道

日本武道館 編

(B5判・上製・箱入・526頁)

日本の武道の全てを網羅した、武道関係者必携の書。武道小百科事典としても役立つ充実した資料編を巻末に収録。



高め合う剣道

筑波大学名誉教授 佐藤成明 著

(四六判・上製・564頁)

教育剣道の実践者として長年の経験をもつ筆者が、古今の文献を手掛かりに日々の修練で大事な事柄を綴る。



禅の思想と剣術

北海道大学大学院教授 佐藤鍊太郎 著

(四六判・上製・386頁)

禅の思想と剣術がどう関わってきたか、武道伝書を基に検証し、剣術が剣道へと発展昇華していく過程をわかりやすく解説。



刀剣の歴史と思想

筑波大学大学院准教授 酒井利信 著

(四六判・上製・346頁)

日本人が、刀剣を単なる武器としてではなく、神聖なものとして捉える思想とは何か。日本刀剣思想の独自性を確かな史料を基に考察する。



人を育てる剣道

剣道範士八段 角 正武 著

(四六判・上製・268頁)

剣道の真価は、気力を練り上げ、肚をつくる修行にある。人間の土台をつくる剣道を目指す著者渾身の剣道指導論。

◎ご注文・お問い合わせ

〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2番3号

日本武道館 教育文化部出版広報課

TEL(03)3216-5147/FAX(03)3216-5158

<http://www.nipponbudokan.or.jp/>